



伊藤

博文

何をめざしたのか

大磯ガイド協会

斎藤 直人

# 目次

## 【はじめに】

1. 文明との出会い・人との出会い
2. 立憲国家構想
3. 憲法政治（国民政治）実践での苦闘
4. あるべき国制への挑戦 ⇒ 立憲政治の本格始動
5. 政党政治へ踏み込む ⇒ 立憲政友会の創設
6. 明治国制の確立  
憲法改革への取り組みと失敗
7. 人生最後の韓国統監で実現したかった事
8. 滄浪閣の夢

## 【纏め】

# 【はじめに】

## 1. 伊藤博文の像 議会政治と伊藤の関係

①国会議事堂には、三体ある。

⇒謎の三体目（国会議事堂の頂上に伊藤の像を仮想—吉武東里）

②小田原、旧滄浪閣

③山口県萩市、伊藤博文旧宅

④ 熊毛郡大和町 伊藤公記念公園

⑤山口県下関市 春帆楼

## 2. 伊藤博文の評価

①戦後の一般的なイメージ

- ・ 軽佻浮薄、女性関係に節度がない
- ・ 保守反動、韓国の民族主義弾圧

②歴史学者などからは、手厳しい

- ・政治家としての一貫性の無さ（坂野潤治）
- ・思想無き現実主義者（司馬遼太郎）
- ・明治天皇；才智あれど時に変節あり

3. 政治家・伊藤博文の本質を掘り起こす

⇒どのようにして、日本の「国制」をつくりあげたのか

①融通無碍なる政治家として

②立憲政治の成り立ちから彼の行動・思想をあぶり出し、その正体を明らかにする

③木戸孝允は伊藤を「**剛凌強直**」と評価

(三つの視点で考察する)

- ・文明・立憲国家・国民政治

# 1. 文明との出会い・人との出会い

3

## 1-1. 生い立ち

天保12年（1841）9月2日周防国熊毛郡東荷村  
（現山口県光市）に生まれる

嘉永7年（1854）、萩の足軽・伊藤直右衛門の養子

## 1-2. 人との出会い

1) 吉田稔麿；久保塾で知り合う

2) 来原良蔵（木戸孝允の義弟）；

手付となり物事の論理性を学ぶ

⇒紹介で松下村塾入門、

3) 木戸孝允；従者となり、目をかけられる

4) 井上馨（志道聞多） 生涯の盟友

### 1-3. 松下村塾

吉田松陰の評価

⇒利介亦進む、中々周旋家になりさふな

⇒才劣り学穉きも、質直にして華なし、僕頗る之を愛す

「周旋家」とは、人から好かれ交渉が上手の意

### 1-4. 松陰の影響

1) 既存の体制の否定、天皇中心⇒尊王攘夷（久坂玄瑞・高杉晋作）

2) ⇒英国公使館焼き討ち、埴次郎暗殺⇒テロリスト

### 1-5. 長州ファイブ 5名の英国留学（1863）

⇒第一の転機 **松陰からの脱却**

⇒第二の転機 尊王攘夷から開国主義、世界的視野

周旋家の誕生 **抜群の英語力**⇒藩内リーダーシップ

## 1-6. 文明を知った「知の政治家」誕生

⇒西洋文明は立身出世の梃子・**知は力**である

## 1-7. 伊藤の文明論

① 個人の思想信条と表現の自由

② ①を秩序づける「**制度**」必要、文明は制度

⇒第三の転機 周旋家から立法者への脱皮

# 2. 立憲国家構想

兵庫県知事時代

## 2-1. 立憲政体の導入へ向けて (何、中島、陸奥、伊藤、田中)

1) 新政府の制度構想『**国是綱目** (兵庫論)』(1969)

① 君主政体

② 政治兵馬の大権を朝廷に帰せしむ

「人心の一致」=日本国民としての意識⇒「廃藩置県」

- ③ 世界万国との通交
- ④ 国民に自由自在の権
- ⑤ 世界万国の學術の普及
  - ⇒ 文明開化の政治、東西両京に大学を
  - ⇒ 「知の政治家」の片鱗
- ⑥ 国際協調、攘夷を戒める

## 2) 岩倉遣外使節団 (1871-1873)

- ① 使節団副使の得意満面⇒日の丸演説、夜遊び
- ② 条約改正、**委任状事件**
  - 木戸の叱責と政治生命 (木戸との盟友関係)
  - ⇒ 大久保を共犯に巻き込む

## 3) **急進主義者から漸進主義者へ**

伊藤自身の内面的な変化 (新しい政治理性へ)  
⇒ 漸進主義者としての伊藤の誕生



#### 4) 征韓論の排除

反征韓派結束に伊藤が奔走（周旋家として）  
伊藤参議へ 木戸の推薦「**剛凌強直**」

#### 5) 憲法意見書（木戸、大久保）

⇒立憲政体の採用（漸進主義）

⇒伊藤が立憲制度導入調査任される

#### 6) 「大阪会議（1875）」とりまとめ、

⇒「漸次立憲政体樹立の詔」

## 『西南戦争、木戸の死去、大久保暗殺』

7) 天皇は、各参議に立憲制度導入意見書作成を命ず

①伊藤、憲法意見書提出⇒国会開設は漸進主義で

## 2-2. 明治 14 年の政変⇒伊藤体制の定着

- 1) 大隈が憲法意見書を天皇へ直接上申  
イギリス流議院内閣制の導入  
伊藤は、大隈の行為を裏切りととった  
⇒背後に福澤諭吉の思想  
⇒大隈政策研究集団の形成 政府部内への浸透  
岩倉⇒井上毅に対抗意見書作成指示（プロイセンモデル）
- 2) 開拓使官有物払下の情報リーク⇒大隈がやり玉  
⇒政府弾劾に発展、払下げ中止決定



- 3) 伊藤が政治家として感じたアイデンティティ危機
  - ① 大隈は伊藤を凌駕する憲法構想・制度構想を展開
    - ・多くの知識人糾合と政府部内にリクルート  
河野敏鎌、前島密、矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄

中上川彦次郎、小野梓その他慶応義塾の俊英

② 西欧の国家論・政治理論を身に着けた、政府部内外の知識人への対抗

⇒伊藤を蔑ろにするイデオロギーリーダー台頭  
井上毅、小野梓等官僚の分を超えたもの

③ 岩倉—井上毅ラインからの克服

4) 大隈重信及び関係者一切の政界からの追放

5) 彼ら台頭する政治的知識人に対抗

⇒独自の律啓国家ビジョン確立のため憲法調査

重要！ **憲法制定・国会開設（1890）の勅諭**

2-3. 憲法調査のために渡欧（1882-1883）

1) 渡欧理由；運用の理解と日本の実情に合わせる

- 2) 随員；山崎直胤、伊東巳代治、河島醇、西園寺公望
  - 3) グナイスト（ベルリン大学教授）やドイツ皇帝からは、議会制度に対する敵対的な考え方
  - 4) シュタイン（ウィーン大学教授）の国家学に感銘
    - ⇒憲政は、議会政治と行政の調和を図るもの
    - 議会制度は利害により左右され、不安定
    - それを補完するものは**行政の制度化**である
    - ⇒君主機関説 憲法の下に君主権を制限する
    - ⇒憲法のみでなく、政府の組織行政を準備すること
    - ⇒憲法構想に確信を持つ、**立憲カリスマへ脱皮**
  - 5) 英国に2ヶ月間滞在⇒将来の日本が目指すのは英国の憲政モデルであると考えていた
- 「憲法政治」形成に向けて⇒陸奥宗光と連携

- 憲法を中心とする全体的な国家の形（国制）に開眼
- 議会を舞台とする国民政治（憲政）実現の確信

## 2-4. 日本のかたちを創る

憲法調査にもとづき、国家の全体構想構築に着手  
（組織行政の整備）

### 1) 憲法創設に伴う関連法、組織の整備

⇒ 議員法等、関連法、内閣制度、宮中制度

⇒ **大学制度改革** ⇐ 大隈重信への対抗

\* 帝国大学を政府のエリート養成機関に！

### 2) 憲法草案作成⇒夏島草案（1887. 6-8）

⇒ 君主権と行政権の優位性

⇒ 君主権の制限；天皇機関説（日本固有の統治）

### 3) 立憲君主たる天皇への教育

### 4) 「欽定憲法」の発布（1889. 2. 11）

## 2-5. 伊藤の目指した立憲政治（憲法政治）とは

⇒シュタインの国家論＋日本固有の思想

### 1) 憲法とは単なる法典ではない

Constitution（英語）

Verfassung（独逸語）

事物の構築・策定、その成立ち・構造の意

### 2) 新しい国制に見合う新たな「知」の制度化

⇒伊藤の知への憧憬

⇒大学改革；「帝国大学」を「知」の創造機関へ

⇒大隈重信への対抗（知識人の糾合、制度化）

### 3) 天皇主権の専制国家（超然演説 1889. 2. 15）

### 4) 国家と社会の二元論（シュタイン）が基軸

Gesellschaft（社会は利害の体系）

Staat（政府は中立であるべき）

- 5) 党派活動は認めるも、政党政治は不可
- 6) 政党政治の可能性は肯定するも、急進論の否定
- 7) 憲法政治＝国民政治 × 超然主義（シュタインの二元論）

①伊藤の国体論 ⇒ 漸進論的進化論

②国民の開化、文明化は必然

③ 治者と被治者の権限と義務⇒憲法にて画定  
⇒治者の権力と運用⇒憲法にて制約される

④ 既存特権階級を温存（華族への立憲主義啓蒙）

⇒ノブレス・オブリージェ；西欧における道德観

「啓蒙専制主義」



「国民のための政治」⇒「国民の国民による政治」  
「政党政治」まで視野に入っていたのか？

# 3. 列強を意識した立憲政治のスタート

## 立憲政治の安定した船出への苦闘

### 3-1. 条約改正問題の行詰り (井上外相の辞任)

- 1) 大隈重信との提携⇒外相就任 (1888. 2. 1)  
伊藤内閣⇒黒田内閣、伊藤は枢密院議長
- 2) 大隈案への批判⇒大隈遭難 (1889. 10. 18)
- 3) 大隈を見限る⇒黒田から山県内閣 (1889. 12. 24)
- 4) 条約改正交渉は延期

### 3-2. 明治憲法発布 (1889. 2. 11) 帝国議会開設 (1890. 11. 29)

#### 憲法政治を守る議会運営への熱意と努力

- 1) 内閣官制改正⇒**内閣職権弱体化⇒今後の深刻な問題**
- 2) 第一議会 (1890. 11-1891. 3)
  - ①山県首相演説「ロシアに対する利益線と主権線の防



衛を！」防衛費増額要求

②陸奥、星亨らの「土佐派」との連携（土佐派裏切）

⇒第一議会無事終了 山県⇒松方内閣

3) 大津事件（1891.5.11）⇒天皇の決断で皇太子へ見舞い  
犯人処罰で政府と司法の対立⇒「皇室罪」適用せず  
⇒**対外硬派思想**・ナショナリズムが背景 露問題せず

4) 第二議会

①「蛮勇演説」樺山海相⇒初めての解散

5) 第二回総選挙での「大選挙干渉」⇒憲法停止危機

### 3-3. 憲法を守る戦いと条約改正への情熱

1) 第一次松方内閣⇒議会对応ができず総辞職

⇒第二次伊藤内閣成立「**元勳内閣**」（1892.8.8）

馬車の事故（1892.11.27）で大磯で療養

井上馨臨時代理では国会運営の荷が重すぎた

(伊藤の交通事故)

1892. 11. 25 に第 4 回帝国議会在招集された直後 11. 27 の午後 2 時 15 分頃伊藤が乗った人力車が官邸正門を出たところ、走行中の小松宮ご息女が乗った馬車と接触、車は横転し、転落した伊藤は全治 2 ヶ月の重傷を負った (後頭部打撲、額裂傷、前歯数本を折る)。翌年 2 月 7 日に復帰

## 2) 腹心陸奥と条約改正を進める

### ① 対外硬派の反撃

- ・ 衆議院解散 (1893、1894)、憲法停止の危機

## 3) 英国との改正新条約調印 (1894. 7. 16)

### ① 対外硬派の反対無し 憲法停止を回避

⇒ 開戦直後の勝利のおかげ

## 4) 豊島沖海戦勝利 (1894. 7. 25) 日清戦争突入

開戦により、対立した民党との妥協が成立

## 5) 下関条約調印 (1895. 4. 17)、三国干渉を克服

## 4. あるべき国制への挑戦 ⇒立憲政治の実現へ向けて

### 4-1. これまでの総括

#### 1) 憲法発布・帝国議会開設

⇒度重なる解散・憲法停止の危機を克服

⇒立憲体制を持ちこたえてきた

#### 2) 議会制の確立

#### 3) 政党勢力の成長⇒立憲制の本格的始動へ！

### 4-2. 政党内閣の出現

#### 1) 明治憲法にもとづく政治運営

①議会による予算の議決権の規定

②政府の富国強兵政策遂行のため、民党への妥協

⇒議会政治の発展は、必然的な流れであった。

2) 第3次伊藤内閣倒れ、伊藤は大隈・板垣を奏上

⇒1898.6 **初の政党内閣・隈板内閣誕生**、獺官活動

で4か月の短命ながら、政党政治への期待

⇒次の山県内閣ですら、民党との提携

#### 4-3. 国民を立憲政治の担い手として

##### 立憲政友会創設に向けて

1) **立憲国民としての意識の覚醒（啓蒙）**

憲法行脚・西日本遊説（1899.4～1899.10）

⇒東京～大阪～九州～名古屋～北陸

2) **文明国民たれ**（世界のダイナミズムへの日本の参入）

改正条約の施行（1899.7）⇒文明国への参入

⇒関税自主権、治外法権撤廃、内地雑居

⇒所謂「愛国心」への警告（偏狭ナショナリズムの排除）

3) 「**教育の力**」の重要性を国民に喚起

4) 憲法・議会制・文明国⇒三位一体として認識

### 【纏め】

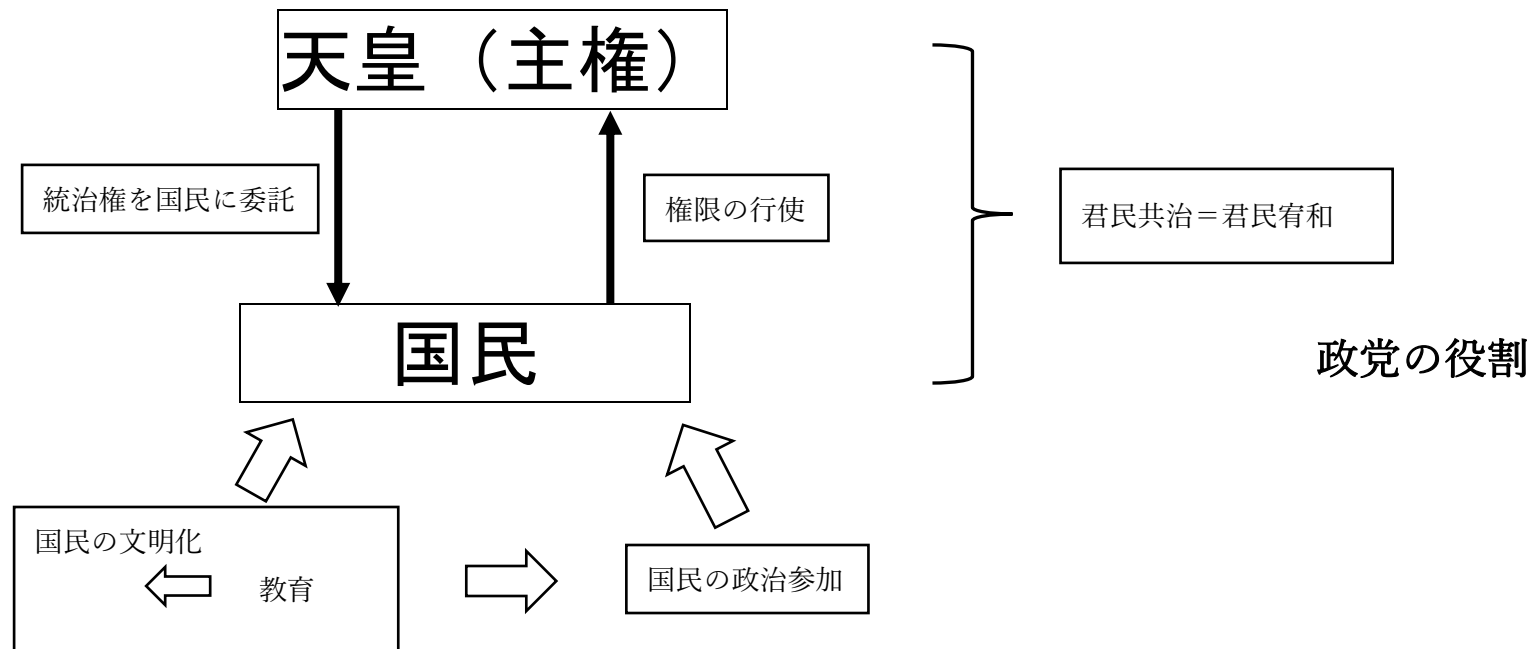
- ・ 憲法政治⇒「文明の民」による「国民政治」
- ・ 文明の民⇒政治に関心をもった経済人
- ・ 立憲君主制と議院内閣制との齟齬があるのか

## 5. 政党政治へ踏み込む ⇒立憲政友会の創設

5-1. なぜ超然主義者と云われた伊藤が政党結成したのか

- 憲法政治における政党政治化は不可避  
⇒ 憲法政治＝利害政治＝国民政治

- 現実論として、議会運営乗切りに政党化必要  
⇒ 天皇の反対、藩閥勢力の反対
  - 民間での利害の自由競争は担保されるが、政府のあり方は、そこから離れたものであるべし
- 1) 過去に2回政党結成を画策するも断念
  - 2) **伊藤の考えた立憲制度**とは、



- ① 通常、立憲政治とは政党政治と同義語
  - ② 立憲政治と政党政治を峻別し、前者により後者を相対化しようとした⇒現状の政党政治への不満
  - ③ 政党間・派閥間の抗争の現実⇒改良の必要性  
状況主義的な判断、行動が必要
  - ④ 国家を構成する諸勢力を宥和、調和させることが立憲政治の肝であり、「讓歩の精神」が不可欠
- 3) 政党結成⇒立憲政治の完成形の実現という伊藤の大きな国家構想のなかでの行動

## 5-2. 立憲政友会の結成

- 1) 新政党創設発起人会 (1898. 6. 14)  
⇒都市部の商工業者を取り込む  
⇒澁澤榮一支援約束するも参加せず
- 2) 実業家の政治的覚醒を促すも参加者少ない

- ⇒岩崎彌之助（当時日銀総裁）の影響力が響く
- ⇒大隈系の政治家、財界人による妨害を懸念
- 3) 憲政党（旧自由党）が合流⇒星亨の手腕に依存
  - ⇒憲政党が伊藤に無条件献党⇒合流
  - ⇒星亨、伊東巳代治の主導

### 5-3. 政友会の理念

- 1) 党名に拘る；党⇒会で、入会を容易にするため
- 2) 規約
  - ① 党と内閣・政府との峻別
  - ② 中央政治と地方自治の区別
  - ③ 党内における総裁の強い指揮権
- 3) 伊藤が、政友会に期待したもの
  - ① 既存の政党政治の刷新
    - 治者と被治者の間の調和を図り、立憲政治に奉仕



## すべきもの

② 政治的人材のリクルート機関としての意義

③ 現代のシンクタンクのような、政策研究機関

### 5-4. 政友会の蹉跌

1) 政友会の船出は、直後から混迷を極めた

① 山県首相から政権移譲の働きかけ⇒山県による  
政友会潰し画策

⇒伊藤は拒否するも原、井上馨は説得

② 伊藤受諾（1900. 10. 7）する閣僚人事で迷走

⇒政党内外の人材確保に不満爆発（獵官熱）

⇒政党内閣の認識に大きな齟齬

⇒結局人材は、殆ど政友会一党単独内閣成立

③ 法案を巡って、閣内、党内に激しい不協和音

⇒第4次伊藤内閣倒れ（1901. 5. 2）桂内閣成立

- ④ 桂内閣との対決を巡り、伊藤と桂と妥協発覚  
⇒原を中心として伊藤の指導力に不満爆発  
⇒尾崎行雄以下離党者続出
- ⑤ (1903. 7. 13) 総裁辞任、西園寺公望が第二代政友会  
総裁 伊藤は枢密院議長、帝室制度調査局総裁

## 2) 蹉跌の原因は何か

- ①伊藤の政党結成は本意であったのか？  
⇒伊藤の理念にもとづく新党結成が出来なかった  
⇒政党は借り物であった；星亨、伊東巳代治の主導
- ② 伊藤の政党政治に対する考え方が党内と乖離  
伊藤は、政党内閣を目指してはいなかった
- ③ 立憲政治に対する伊藤の理想が現実と乖離
- ④ 伊藤を政党から切り離し、枢密院に押込める  
山県・桂の策謀に乗ってしまった。

# 6. 明治国制の確立

## 憲法改革への取組みと失敗

### 6-1. 憲法改革への取組み（1907年の憲法改革）

政友会総裁として、立憲国家・国民政治実現に踏み出したが、現実の政局の中で挫折。



さらなる長期的かつ根源的な国家構想に着手する。

【目的】； **国制の運営を内閣に一元化（大宰相へ）**

【背景】；環境の変化に対応して国制見直し

- ・ 政党勢力の伸長・軍事行政の自立化
- ・ 大陸への進出等の要因

- 1) 伊藤は、調査局総裁復任、副総裁；伊東巳代治  
調査局御用掛；有賀長雄（制度設計）
- 2) 皇室典範に基づく皇室制度の完成  
皇室を国家の要素と位置付ける  
⇒皇室の長の天皇と国家元首の天皇は別人格  
⇒天皇の国家機関化⇒天皇大権の突出を防ぐ  
⇒皇室典範を国家の根本法とする
- 3) 内閣のもとに統治権を集約し、国制の分散防止  
⇒公式令と内閣官制の改正（1907. 1. 30）  
⇒大宰相主義
- 4) 公式令制定が調査局の最大のミッション  
⇒軍部の抑制（帷幄上奏権への挑戦）  
(問題) 軍部の内閣からの自立の動き（日露戦争後）  
⇒軍部を内閣の統制下に置く（文民統制）

⇒憲法改正はハードルが高かった

⇒公式令制定、全ての法律命令に首相の副署要とす

## 5) 軍の巻き返し

①山県は、“この変更は統帥の系統を錯乱し、軍制の根底を破壊するものである”とし、寺内陸相「軍令」の制定を指示

### ②伊藤と山県トップ会談

⇒統帥事項と行政事項を判別させるための軍令を伊藤に認めさせた。

⇒伊藤の目論見も、軍部・山県の反撃により決着

# 7. 人生最後の韓国統監で実現したかった事

(はじめに)

伊藤は 65 歳を過ぎ、体力的に衰えてきた、彼が最後になぜ韓国統監になって火中の栗を拾おうとしたのか？

- ・ 日露戦争（1904. 2. 6-1905. 9. 5）勝利  
⇒朝鮮、満州の権益確保  
⇒第一次日韓協約（1904. 8）財政・外交顧問の雇用
- ・ ポーツマス条約（1905. 9. 5）  
⇒第二次日韓協約（1905. 11. 17）により京城に統監府設置、外交権は日本に、保護国化  
伊藤は初代韓国統監就任（1906. 3）
- ・ 第三次日韓協約（1907. 7. 24） ハーグ密使事件

⇒ 韓国内政掌握、韓国軍解散、日本軍駐留

- ・ 従来の伊藤への評価；日本の大陸進出の先蹤（せんしょう）  
韓国併合への道均しをした

### 7-1. 何故伊藤は韓国統監になったのか

自ら憲法政治の完成形として設立した政友会の運営がうまくいかず、その実現の最後のチャンスと考えたか？

1) 二つの論点；「文明」、「軍のコントロール」

2) 「文明」；東アジアに文明を広めたい

⇒ 「文明の伝道」

3) 「軍のコントロール」；軍の指揮権の奪取

日本の憲法改革との連動

⇒ 軍の統帥権の奪取 ⇒ 文官による初の統帥権

⇒ 憲法改革では、山県に妥協せざるを得なかった

⇒ 満州問題と陸軍の統制

## 7-2. 実際の韓国統治はどうだったのか

(統治の考え方)

① 韓国人を文明の民に導く

② 民本主義      国民政治

    法治主義      事大主義との決別

    漸進主義

1) 教育改革

    ポイント； 儒教教育の公共の場から廃止

    韓国宮廷から儒家を放逐する

    ⇒伊藤は、机上の空論を嫌った

① 韓国知識人を中心のナショナリズムに阻まれる

② 対話⇒恫喝

2) 軍政改革



## 日本の憲法改革の失敗

⇒日本の統治改革に向けての先例としたかった

① 統監は韓国駐留軍隊司令官への指揮権を持つ

⇒陸軍の大きな反発、軍との緊張関係

② 軍内部の指揮伝達の詳細に目を光らす

### 3) 韓国併合 (annexation) への翻意

当初伊藤は韓国併合には反対であった

伊藤の関心は、韓国問題より満州問題にあった

① 1907年、統監府間島 (かんとう) 派出所設置

⇒ロシア南下対応、日本軍の過剰行動防止

② **間島問題**が満州全体に影響を与える

⇒清との交渉で日本は譲歩、満州問題は切り離し

朝鮮半島の確保を優先⇒併合に同意

③ 1909年、清と間島協約；土地所有権

### 7-3. 伊藤の描いた韓国統合構想（伊藤のメモ）

- 1) 韓国議会の開設
- 2) 韓国人による責任内閣

以上から、民族自決を認め、韓国再独立の道を描いたのではないだろうか？

そして、その後に、日本の立憲政治の完成形を夢に見ていたのではないか。

しかし、1909年10月26日、その答えはハルビン駅頭での銃声とともに歴史のかなたへと葬られた。

伊藤は、撃たれて絶命まで30分、かすれてゆく意識の中で、撃った相手が韓国人であるとわかると、

「俺を撃ったりして、馬鹿な奴だ！」

それまで伊藤は、いみじくも、梅子夫人に言っていたそうである

「自分は満足な死にはできぬ、敷居をまたいだ時から是が永久の別れになると思ってくれ」

## 8. 滄浪閣の夢

### 8-1. 滄浪閣への道

1) 築地⇒高輪・御殿山（1889）⇒大磯・滄浪閣（1896）

荏原郡大井町（1907）

2) 金沢・夏島（1887）、小田原・滄浪閣（1890）、須崎

野島（1898）、大磯・山の別荘・清琴亭（1903）  
山口県光市（1910）

## 8-2. 滄浪閣の歴史

- 1) 大磯・滄浪閣（1896）⇒本邸（1897）⇒李栽克⇒  
李垠（1921）⇒檜橋渡（1946）⇒西武鉄道（1951）  
⇒明治記念大磯邸園（2018）
- 2) 小田原・滄浪閣（1890）（巖谷一六揮毫）  
夏島別荘一部移築（父十蔵居宅）  
⇒大磯・滄浪閣（1896）（李鴻章揮毫）
- 3) 滄浪由来；楚辞（屈原）・漁夫之辞より
- 4) 伊藤の漢詩

### ①滄浪閣での心境（大磯偶成）

醉中天地潤 世事且相忘 不問滄浪水  
功名夢一場

### ③ 東宮殿下行啓

富嶽開顔帯紫霞 湘南春色万人家 鶴車暫駐滄浪閣  
古木庭中又著花

#### 5) 亡き先輩への想い

「四賢堂」を建立（1903）（東宮・大正天皇揮毫）

⇒「五賢堂」⇒「七賢堂」

#### 6) 大磯小学校（北本町）での貯金の奨励

#### 7) 伊藤満州視察、大磯駅出発、車中の一詩（1909. 10. 14）

秋晚辞家上遠程 車窓談尽聴虫声 明朝渤海波千尺  
欲弔忠魂是此行

ハルビン駅頭にて兇手に倒れる

国葬（11. 4）日比谷公園、

大磯・大運寺にて追悼大法会（11. 26）

### 8-3. 博文を巡る人々

1) 山県有朋

立憲政治への考え方で対立するも、伊藤死去の報を受け、彼のこれまで国家、皇室に尽くしてきたことを評価。下記歌を詠む。

かたりあいて 尽くしし人は 先立ちぬ  
今より先の世をいかにせむ

2) 大隈重信

維新後は、大隈は先に参議となる  
大久保、木戸亡き後は伊藤が主導権  
明治 14 年の政変で追放するも、

⇒大隈を外相に起用

⇒条約改定問題で辞任させる

しかし、大隈・板垣を推薦、大隈内閣成立

伊藤は、「大隈か？あれは人物さ、何でも話しを聴い

て面白いのは大隈さ！」

大隈は、「物事は規則をたてて整然と行うが、時として道を失いあきらかでないことがあった」

### 3) 桂太郎

伊藤がわだかまりをもっていた

⇒第4次内閣での非協力

### 4) 亡き先輩への想い

木戸、大久保の偉大なる性格をほめたたえる

二人に仕え、リーダーにのし上がる

起居している、滄浪閣の洋館の応接間に、

三条、岩倉、木戸、大久保の肖像を掲げていたが、

その後明治36年、庭の東部の梅林に「四賢堂」を建

て、上記肖像を掲げる。伊藤の死後、梅子夫人が霊を

堂中に分祀、「五賢堂」とした

## 5) 井上馨との関係

国政上の意見は異にしたが、私人同志では無二の親友

## 6) 伊藤の体調について

①伊藤の体は強健であったが、1899年頃から健康に不安を生じてきた⇒政治力の減退

② 食事は家では番茶、茶漬けなど質素なもの  
外では仏料理など濃いものを好んだ

## 7) 梅子夫人との関係

① 尊敬する人物は、天皇の次は「おかか」のみ

② 梅子夫人との精神的な結びつき

⇒夫婦仲は良かった

## 8-4. 芸者との晩年の日々

1) 大阪の芸者小吉・文公、広島的光菊

2) 伊藤が寵愛した大阪の芸者・小吉（樋田千穂）



『つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾におなり』  
樋田慶子（樋田千穂の孫）著

【纏め】

1. 戦後から現在まで、伊藤のいわゆる評価；
  - 1) 明治憲法（天皇大権、軍国主義への道）作成の張本人
  - 2) 韓国統監として韓国併合へ導く
2. 伊藤の実像とは、  
「**知の政治家**」  
⇒ 貧しい農家出の伊藤が、身分制度を超えて世に出ることを可能としたものが、『知』
3. 維新後、伊藤が邁進したものは、立憲政治実現であり、国民政治実現のための「制度形成」

⇒「憲法」「帝国大学」「帝国議会」「政党・立憲政友会」  
「責任内閣」「韓国統監府」

#### 4. 伊藤の政治思想

##### 1) 漸進主義的な秩序観（明治14年政変）

⇒議会開設に対して慎重に議会制度の導入、定着

##### 2) 知とは、観念的な学問を嫌忌、実学を好んだ

⇒利便を生み出し経済的生活を豊かにする実用的な知識を愛した

##### 3) 知を愛するがゆえの「主知主義」的思想

⇒「ナショナリズム」の非合理性に対する認識不足  
「文明」がすべてに優先するとの認識

#### 5. 明治憲法のもとでの理想の立憲政治の実現を目指す

##### 1) 立憲政治の理想と現実のギャップに悩む

⇒伊藤の真意を理解する人がどれだけいたのか

⇒自ら政党を結成せざるを得ないところに踏込む

2) その実現を韓国統治に求めようとするも挫折

⇒悲劇の結末となった

6. 伊藤が感じた蹉跌は今日的な課題

1) 日本人は伊藤の云う「文明の民」となっているのか

2) 我々は現在、改めて「伊藤博文」を正当に評価する段階に来ているのではないだろうか

(完)

## 参考文献

1. 『伊藤博文 知の政治家』 瀧井一博著 中公新書
2. 『伊藤博文 近代日本を創った男』 伊藤之雄 講談社
3. 『伊藤博文公と金沢別邸』 楠山永雄著 金沢郷土史愛好会
4. 『大磯歴史物語』 池田彦三郎著 グロリア出版
5. 『論文・日露戦争への道』 黒沢文貴 東京女子大学教授
6. 滄浪閣と春畝公の半生 川本鳥城生 博文館
7. 『伊藤博文の日常』 明治記念大磯邸園に関する基本計画検討委員会より
8. 茶屋町町誌・周辺誌 (1) 渡邊武美
9. 岳父玄敬誌 進藤修平